

編集後記

研究会を経たあとのながめ

本企画では、フィールドワークを展開されてきた方々に、渦中からのそれぞれのながめを議論の俎上に上げてもらうことで、フィールドワークの可能性を見ようとした。話題提供や総合議論の中からは、三者三様の立場の違いがあきらかになった。しかし彼らには共通するものも少なくなかった。本企画だけからフィールドワークの次の次のながめは見えなかったかもしれないが、次への対話を開くためにも、彼らの現在のながめがどのようなものに見えたのかについて、“フィールドワークの時間”、“実践/行為の塊としての「報告」”、“ベシストとしてのフィールドワーカー”という3つのポイントから「研究会を経たわたしからのながめ」を返したい。

フィールドワークの時間

学校で習うフィールドワークにはフィールドワーカーの人としての姿がない。ところがフィールドワーカーは、時には生活者として書かねばならないし、年もとるし、立場も変わる。論文はフィールドとは直接関係のない人の査読を経て、フィールドのことを知らない人にも発信されることを考慮に入れなければならない。それらはいわばフィールドワークの外側の時間である。フィールドワーカーは、フィールドワークの時間とそのほかの時間という2つの時間に生きる人である。

その意味で、おそらくフィールドワーカーは2タイプに分類できる。1つ目のタイプは、フィールドの時間にどっぷりつかり、外側の時間に戻るのにやや時間のかかる人、2つ目のタイプは、外側の時間に住んでいて、フィールドワークの時間を手早く済ませてしまう人である。もっとも前者にしても、外側の時間は否応無しに流れるのがミソなのだけけれど・・・。

本企画で扱った「転がり続ける渦中からのながめ」は、否応なくうける外側の時間の変

化とフィールドとの関わりかたが隠れた主題としてあったと思われる。それは、松嶋さんの発表の中の施設の指導員の方の変化であり、大倉さんの発表のなかの「正直、昔ほど共感できなくなった気がする」であり、松本さんの発表の「センプクキカン」である。

実践/行為の塊としての「報告」

これは、発表スタイルにもいえる。いわゆる実験研究の「報告」が成果であり、一つの段階の終わりであるにもかかわらず、フィールドワークの報告は、フィールドから切り離された何かではなく、フィールドの時間を、外側の時間上に再現しようという試みである。それはフィールドの時間そのものを変容させる可能性も含んだ実践／行為の線上にあるものである。

ベーシストとしてのフィールドワーカー

フィールドワーカーは、そのような2つの時間の間を、主人公として主体的に全体をアレンジメントしているというよりも、その流れのなかで、なにが一番スポッとはまるのかそれを探り(大倉さん・松本さんの方法論の発見)、時には目標とする時点をずらして将来的にスポッとはまる点を探る(松嶋さんの関与観察)。例えば、話題提供者の発表を改めてみると、松本さんの「そうとしか思えない」をはじめとして、半ば受動的な表現が目につく(松嶋さんが「フィールドワークの私」と言い換えているのもそうかもしれない)。松本さんがロックバンドのたとえを出しているのも、それに則れば、フィールドワーカーは、ヴォーカリストやギタリストに多く見られるようにメロディを奏でる人というよりも、今この瞬間、あるいは次の瞬間に全体として「気持ちいい」ぴたっと来る音とリズムを探るベーシストのようである。

今後の課題

そのようなフィールドワークの知の創出方法は、いわゆるハードサイエンスの知の創出方法とはかなり趣が異なるように見える。そして、まさに、フィールドワークのような知の生成にどのような意味を見出していくことができるか、個々の研究をどのように知の運動につなげていくことができるかに、今後のフィールドワークの可能性がかかっているように私には思える。それは、フィールドワークの時間と外側の時間の一つである科学の時間とをどのようにつなげるのかという点にも繋がる問題である。この点は、本企画だけで

は十分明らかになったとはいえ、今後の検討の課題として残されたように感じる。それらを議論するうえで、本企画で明らかになった「フィールドワークの渦中からのそれぞれのながめ」、それを大切にして次の議論につなきたい。(荒川 歩)

この編集後記は、原稿の最終校正を終えて、あとは表紙のデザインのチェックを待つだけとなった2007年8月28日の夜に書いています(熱烈なラブレターを思わず書いてしまう危険な時間帯です)。

さっきまで総合討論のチェックをするため、当日記録した音声を聴いていました。松嶋さん、大倉さん、徳田さん、山本さん、村上さんなど参加者が自分の言うべきことをみんなに分かってもらおうとていねいに話していました。その場全体を把握する超越的な立場にでもいるような不思議な気持ちと同時に、皆さんがすぐそこにいるようで少し楽しい気分になりました。

ワークショップというのはガチンコでやりあうので、その場で相手の言っていることを理解しているのか怪しいですし、議論が深まらないことが多いように思います。実際僕自身この冊子の編集を通して、研究会当日に話されていたことが少しずつ理解できましたし、今更ですがいろいろと尋ねたいことが出てきました。

一方で、文字媒体だけのやりとりはどうしても計算をしてしまいます。もしくは、言葉を操ろうとしてしまいます。思わず言ってしまう、そんな言葉と主体の境界があいまいになる勢いのある瞬間が文字媒体だけのやりとりでは訪れにくいように思います(学者の世界では、厳密性を重んじるあまり、文字媒体でのやりとりと同じように話す人が少なからずいますが・・・)。

このワークショップと冊子は、そういった不備に応えようとしているように思えます。6時間ワークショップをやり、その後メールでやりあい、論文を書き(大倉さんが松嶋研究について)、参加者の寄稿を含めて冊子にし……。贅沢だと思いますが、この贅沢は質的研究には欠かせないように思います。

いつもさしあたりの結論しか手にすることが出来ず、誰かに自分が大切だと思えるあの瞬間のことを語るけれどもそう簡単には分かってもらえず、もしくは分かってもらえたよ

うに見えても本当に分かってもらえたのかという不安はぬぐいされず、でも僕にはこれしかやりたいことがない。

そんな探究を続ける贅沢と刹那さの結晶がこのワークショップでありこの冊子でしょう。次は6時間と言わず話すことがなくなるまでぶっ続けでワークショップをやりませんか!?(あのスキナーとロジャースが似たようなことをやっています)

さて、この企画は荒川さんが言い出したことでして、僕はしばらく「荒川ワークショップ」と呼んでいました(笑)。軽い気持ちで企画に乗って、いつの間にか冊子化まで来てしまいました。今、荒川さんに感謝の気持ちでいっぱいです。こんなに面白い冊子を一緒に手がけることが出来て正直自慢です。ありがとう!

それからこの企画と冊子は僕と同世代である松嶋さん、大倉さん、徳田さんの快い参加および寄稿がなければありえませんでした。学問することに真摯で貪欲でかつ懐の深い3人がいなければ僕にとって学問することがどれだけつまらなく心細いことかと思います。感謝!

また、研究会に参加してくださった山本さんには研究会後のメール上での議論から今回の寄稿まで「お子ちゃまの遊び」に付き合ってくださいました。子どもの遊びが創造的であることを山本さんは知っているようです。謝謝!

最後に、この企画に参加された方から個人的にいくつか励ましの言葉をいただきました。当日参加いただいた方々にもお礼を言いたいと思います。ありがとうございました!

この冊子が当日の議論を振り返り(初めての方はこの議論に触れて)、牛のように何度も何度も反芻することを通して、創造的な仕事へと繋がる土壌となることを切に願っています。(松本光太郎)